

從日語時間量詞「三年」看文化表象：以諺語為中心

楊錦昌、林文瑛

輔仁大學日本語文學系教授、講師

摘要

在《日本古典文學》的教學現場，曾有學生針對《伊勢物語》第 24 段〈梓弓〉中的「三年」時間量詞涵義提出問題。這個問題觸動筆者對於「三年」這個量詞的關注。經由先行文獻的探討，發現吉村耕治的「Active Learning の教材としての三重文肢構造(Tricolon)：言語文化的視点から見た日英語表現の文化的相違の多様性 (第 100 号 記念号)」論著。不過，據筆者初步探討，該論述主要針對數字「3」本身研究，目前尚未發現有針對「三年」一詞的文化含義的相關研究。有鑑於此，本文試圖以日語的「三年」一詞為對象，從中探討其中的意涵與文化表象。

關鍵詞：《伊勢物語》(梓弓)、三年 (San-nen)、數字 3、時間量詞、文化表象

受理日期:2021 年 03 月 04 日

通過日期:2021 年 05 月 14 日

Cultural Representation as Seen through the Japanese Time Noun "San-nen" (三年): Proverb as an Example

Yang, Chin-Chang、 Lin,Wen-Yin

professor&Lecturer, Department of Japanese Language, Literature & Culture, Fu Jen Catholic University

Abstract

In "Japanese Classical Literature" class, some students asked about the meaning of the time noun "three years" in "Azusa-yumi" (梓弓) in paragraph 24 of *Ise Monogatari* (伊勢物語). Taking the question as a stepping stone, I began to look into the quantifier of "three years." Then, after some research, I came across the paper, "Tricolon Meeting the Criteria of Teaching Materials for Active Learning: The Variety of Cultural Differences between English and Japanese," by Kohji Yoshimura. However, Yoshimura's paper only deals with the number "3" itself. In fact, in existing literature, there is no extensive discussion on the whole cultural significance of the term "three years". Therefore, this paper aims to focus on the word "three years" in Japanese, exploring its function and cultural representations.

Keywords: *Ise Monogatari* (*Azusa-yumi*), three years (San-nen), number three, time noun, cultural representations

日本語の「三年」という時数詞を通して見る文化表象 —ことわざを中心に—

楊錦昌、林文瑛

輔仁大学日本語文学系教授、講師

要旨

日本古典文学の教育現場において、受講生から『伊勢物語』第24段「梓弓」に見られる「三年」という数字の意味について質問が呈されたことがある。この質問が契機となり、三年という数量詞に関心が向くようになり、先行研究を調べてみたところ、吉村耕治「Active Learning の教材としての三重文肢構造(Tricolon)：言語文化的視点から見た日英語表現の文化的相違の多様性 (第100号 記念号)」という論考が目にとまった。しかしこの論文は、数字の「3」そのものにのみ注目するにとどまるものであり、管見の及ぶところでは、「三年」という語の文化的な意味全般に広く焦点を当てた論考は他に見当たらない。そこで、本稿は、主に日本語の「三年」という語に焦点を当ててその役割や文化的な表象についての考察を試みる。

キーワード：『伊勢物語』「梓弓」、三年（さんねん）、3という数字、
時数詞、文化表象

日本語の「三年」という時数詞を通して見る文化表象 —ことわざを中心に—

楊錦昌、林文瑛

輔仁大學日本語文學系教授、講師

1. はじめに

日本古典文学の教育現場では、時として学生から思いがけない質問が呈される。

例えば『伊勢物語』第24段「梓弓」において、「三年」という数字の意味するところについて説明を求められたことがある。

むかし、男、かたみなかにすみけり。男、宮仕へしにとて、別れ惜しみてゆきにけるまゝに、三年來ざりければ、待ちわびたりけるに、いとねむごろにいひける人に、「今宵あはむ」とちざりたりけるに、この男來たりけり。「この戸あけたまへ」とたたきけれど、あけで、歌をなむよみていだしたりける。

あらたまの としの三年を 待ちわびて ただ今宵こそ 新枕すれ

といひいだしたりければ¹

受講生にとってのこの部分に関する疑問は、宮仕えに行った夫の帰ってくるのを待ちくたびれた女主人公が、なぜ三年経って再婚することができたかという点である。

これが機会となり、三年という数量詞に目が向くようになった。そこで先行研究を調べてみると、「Active Learning の教材としての三重文肢構造(Tricolon)：言語文化的視点から見た日英語表現の文化的相違の多様性 (第100号 記念号)²」の論考が目にとまった。この

¹ 片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子校注訳者 (2006) 『新編日本古典文学全集 12 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』東京都：小学館 p138

² 吉村耕治 (2014) 『研究論集 第100号』大阪府枚方市：関西外国語大学短期大学部

論文は数字の「3」に関して次のように述べる³。

統語上(文法上)の 3 回の反復を含む三重文肢という構造だけではなく、このコカコーラの広告文に含まれる 3 回の音の反復にも、日本語の諺の 「石の上にも 3 年」の数詞 3 と同様に、「ひと区切りをつける」ことができるという 数詞 3 の性質が反映している。(p323)

これは数字の「3」そのものにのみ注目した考察に過ぎず、管見の及ぶところでは、「三年」という語の文化的な意味全般に広く焦点を当てた論考は見当たらない。とは言え、『新編日本古典文学全集』所収『伊勢物語』「梓弓」の頭注には、「三年」について以下の解釈を示した部分がある。

『令』の戸令に、「已ニ成ルトハ雖モ、其ノ夫外蕃ニ没落シテ、子有リテ五年、子無クシテ三年帰ラザルトキ、及ビ逃亡シ、子有リテ三年、子無クシテ出デザル者ハ、並ニ改嫁ヲ聴ス」とあり、この段の場合、夫が消息不明で三年も経れば、他に嫁してもかまわない慣習などにより「三年来ざりければ」としたものと思われる。

これにより、三年という数字が当時の習俗の中で特殊な意味を持っていた事実を知ることができる。吉村氏が述べるように、「三」には「ひと区切り」を象徴する意味がある他に、法律的な観点から三年を以て制限を解除するという意味も含まれることがわかる。したがって「三年」が有する意味について論じる際、全般的な観点においてはその多面性を解明する必要があるものの、局面に限って見れば、『伊勢物語』「梓弓」における「三年」が当時の法的・制度的な観点から見てどのような文化的意味を持つかという点に目を向けることも疎かにできない。そこで、本稿では、主に日本語の「三年」という語に焦点を当ててその役割や文化的な表象を考察してみることと

³ 本論文では、「三」と「3」の二種類の表記があるが、「三年」といった熟語や「三」の字形に関するものを、本文のまま「三」と表記し、数字や独立性を強める場合、数詞「3」と表記する。但し、引用文に関連するものは、本文のまま「三」、もしくは「3」とすることがある。

する。具体的には、北村孝一編集（2012）『故事俗信 ことわざ大辞典 第二版 大型本』⁴を資料として考察を進める。

2. 「三年」とは数量詞なのか

「三年」という語には、日本語で「サンネン」と読む（表記する）漢語と「みとせ」と発音（表記）する和語がある。また、語構成から見れば、三年は、数字の「三」と時間を表す「年」を組み合わせて作り上げられたものであり、語学的観点から言えば、三という数詞に、助数詞（接辞、類別語）の「年」をつけて構成された数量詞であると見なすことができよう。しかし一方では「数詞と助数詞から構成され、後者が前者の直後に置かれる」数詞数量詞⁵であるとする見解もある。

「数量詞」について、は「日本語の連体数量詞と遊離数量詞の分析⁶」において、「単純なようで厄介な問題を含んでおり（中略）単純に『数量を表す語』という理解があれば十分ということなのだろうか、多くの論考では、数量詞は定義されないままである」「数量詞と一口に言っても、その実態はきわめて多様である」と述べ、その問題点を指摘した上で綿密に論考を進め、特定数量詞・不特定数量詞という区分を立て、数量詞とは、「『数や量に関する表現』ではなく、『数量』を表示するものと捉えることにする。従って、速度を表す『時速 40km』などは数量詞と見なさない」と定義している。

氏の論文では、数量詞の持つ意味や機能の差異に関して以下のように纏められている。

⁴ 2012年2月20日、小学館。以下では『故事俗信 ことわざ大辞典』と略す。

⁵ 北原博雄（2018）「日本語における“[数詞+X]”の数詞数量詞性」『論叢』第59号 pp. 71～87、玉川大学文学部）において、数詞数量詞（NQ）は、2冊、3本、4メートル、5リットル、6回、7分といった言葉が例として挙げられている。

⁶ 加藤重広（1997）『富山大学人文学部紀要』26号富山市：富山大学人文学部 pp.31-64

【表一】

非存在数量詞	連体数量詞	〈属性〉を表す
	遊離数量詞	〈動作量〉を表す
存在数量詞	連体数量詞	〈集合的認知〉を表す
	遊離数量詞	〈離散的認知〉を表す

『伊勢物語』「梓弓」における数量詞「三」を論じるに当たって、以下では「女主人公が宮仕えに行った夫を「三年」待ちくたびれた」という構造に集約して考察を進めることにする。ここで言うところの「三年」は、副詞的な働きを持ち、後ろに出てくる「待ちくたびれた」という動詞を修飾し、連用修飾的な働きが顕著である。そこで上述した論点を踏まえ、改めて『伊勢物語』「梓弓」に使用される三年という言葉を見ると、単なる数や量に関する表現ではなく、三年という纏まりのある時間としての「数量」を表示していると考えられる。そのため、これを「数量詞」として見なしても差し支えなからう。

この三年という数量詞は、加藤氏が不特定数量詞と見なす「たくさん、かなり」といった機能を持つものとは異なり、明確な概念を示す特定数量詞に属する。しかも、ともに類似の内容を示す「3杯のジュースを飲んだ（連体数量詞文）」と「ジュースを3杯飲んだ（遊離数量詞文）」の二文に使用される「3杯」という数量詞の働きとも区別される。そのため、遊離数量詞文として「夫を三年待ちくたびれた」という構文が可能であるのに対し、「? 三年の夫を待ちくたびれた」という連体数量詞文が成立しない。したがって、この「三年」は「時間や回数、費用などを表す場合のほか、変化量や程度差を表す場合には、遊離数量詞に対応する連体数量詞が存在しない」という前述した論点に繋がることになる。したがって、『伊勢物語』「梓弓」で使われる「三年」は、まとまりのある「待ちくたびれた」という動作の時間的な量（動作量）を表す遊離数量詞として見なすことができよう。

そのため「三年」という語は数量詞として扱うことができるのであるが、その機能について見れば連用修飾的な働きが目立ち、時間

の数量を表すことが明確であることから、本稿では、仮りにこれを「時数詞」と呼ぶことにする。已に述べたように、「三年」という言葉は、三という数詞に、助数詞（接辞、類別語）の「年」を付けて構成された数量詞であるだけに、三という数詞自体が持つ本来の意味を疎かにすることはできない。そこで以下に3という数詞の意味について紙幅を割いてみたい。

3. 3とは何か

前述したように、吉村氏に基づけば、数詞3には、「ひと区切りをつける」という性質があるとされる。そこでこの点を確認するため、まず通時的な観点から三の字形を概観する。

【図一】

字形演变							
甲骨文	金文	篆文	隶书	楷书	行书	草书	标准宋体
𠄎	三	三	三	三	三	三	三
前17	井侯墓	说文解字	华山神庙碑	张猛龙碑	赵孟頫	怀素	印刷字库

この図⁷には三の変遷が示されており、三が本来持つ意味をここから窺うことができる。

次いで中国の古典に基づき三の意味を改めて求めてみると、『説文解字』には「天地人之道也。从三數。凡三之屬皆从三。𠄎古文三从弋（天地人の道なり。三數に従う。凡そ三の属、皆三に従う。𠄎、古文三、弋に従ふ）」とある。つまり三とは、天地人の道のことでであるとされる。清の段玉裁は『説文解字注⁸』において以下の注を加えている。

數名。天地人之道也。陳煥曰。數者、易數也。三兼陰陽之數言。一下曰道立於一。二下曰地之數。王下曰三者、天地人也。老子曰。一生二。二生三。三生萬物。此釋三之義。下釋三之形。故

⁷ <http://www.vividict.com/Public/index/page/details/details.html?rid=12092>（象形字典）を利用した。

⁸ 段玉裁（2005）『説文解字注（標點本）』臺北市：藝文印書館 p9

以於文二字別言之。於文一耦二爲三。成數也。（下線は著者による）

（三は數の名であり、天地人の道である。陳煥が言うには、數は易の數であり、三は陰陽を兼ねる……三とは天地人のこと。老子が言うには、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。……一に二を加えると三となる。）

ここに示されているように、三という時數詞は、「天地人の三才の道」や「陰陽を兼ねること」という意味を有する他に、「万物を生ず」という意味も含むとされる。老子の「三生萬物」の思想については、『道德經』第四十二章に以下のように述べられている。

道生一，一生二，二生三，三生萬物。萬物負陰而抱陽，沖氣以為和。人之所惡，唯孤、寡、不穀，而王公以為稱。故物或損之而益，或益之而損。人之所教，我亦教之。「強梁者不得其死」，吾將以為教父⁹。

すなわち、「道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。万物は陰を負ひて陽を抱き、沖氣もって和となす」とされ、また「故に物あるいはこれを損して益し、あるいはこれを益して損す」と見なされるので、三は、まさに万物を生じ、陰陽を以て物事を調和することを意味する。換言すれば、三は、ひと区切りをつけるという性質のみに限らず、さらに万物の生成とその運行、変化、調和という天地に関わる根元的な側面をも有している。この点には、日本古代の『古事記』序文に述べられる以下の内容に相通じるものがある。

然、乾坤初分、參神作造化之首。陰陽斯開、二靈爲群品之祖¹⁰（然れども、乾坤初めて分れて、參はしらの神造化の首と作

⁹ <http://www.chineseclassic.com/LauTzu/LaoTzu05.htm>（數位經典）及び老子文・趙孟頫和鮮于樞書（2002）『道德經』商務印書館（香港）pp.70-71による。

¹⁰ 山口佳紀、神野志隆光校注・訳（2007）『新編日本古典文学全集1 古事記』東京都：小学館。p6 上巻の序に「臣安万侶言。夫、混元既凝、氣・象未効。無_レ名無_レ爲、誰知_二其形_一。然乾坤初分、參神作_二造化之首_一。陰陽斯開、二靈爲_二群品之祖_一。所以、出_二入幽・顯_一、日・月、彰_二於洗目_一、浮_二沈海水_一、神・祇呈_二於滌身故_一」とある。

れり。陰陽斯に開けて、二はしらの靈群品の祖と為れり)

ここにおいても物事の生成は、三という数字と深く関連している
と見られる。両者のこうした共通性に基づけば、数詞の三に助数詞
の年をつけて構成される時数詞「三年」は、「ひと区切りをつける」
という限定的な概念にとどまるのではなく、物事の生成、転換、及
び新展開を意味するものと考えられる。例えば、冒頭に挙げた『伊
勢物語』「梓弓」に示される「あらたまのとしの三年を待ちわびて た
だ今宵こそ新枕すれ」という歌に関して生じた諺「三年の後の新枕」
において、女主人公が宮仕えに行った夫を待つ時間は閉鎖的な概念
を持つ三年間であり、新枕する今宵も明確に「ひと区切りをつける」
ものである。しかしながら、男女の関係に焦点を当てて見れば、「三
年」は、夫婦関係から『令』の戸令に記述されるように「改嫁ヲ聴ス」
という意味に変容し、さらに「あひ思はで離れぬる人をとどめかね
わが身は今ぞ消えはてぬめる」という結末となる。

このような観点から見ると、時数詞三年は、「ひと区切りをつける」
ものというより、むしろ前述した数詞3が意味する「三生萬物」に変
移し、物語や出来事を新しく展開させる役割を果たすものであると
言うにふさわしい。そこで以下では、こうした文化的な意味や概念
において『故事俗信 ことわざ大辞典』に収録される時数詞三年に関
連する諺について、少しく分析を加えてみたい。

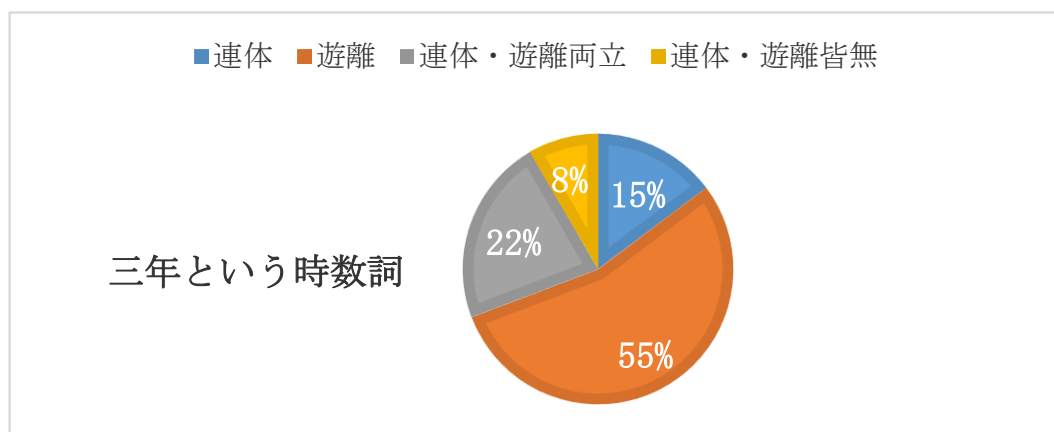
その際、分析の際の基準を『伊勢物語』「梓弓」の用法に合わせる
ため、以下では変化の特質を伴う時間量を表す遊離数量詞としての
「三年」を主な対象とする。

4. 三年は万物や出来事を生ずるか

『故事俗信 ことわざ大辞典』に、三年という時数詞が付く諺・故
事俗信は、前に取り上げた『伊勢物語』「梓弓」に基づく「三年の後
の新枕」を除いては、全部で155個収録される。そこで加藤氏が提
起した「連体数量詞（3杯のジュースを飲んだ）」と「遊離数量詞（ジ
ュースを3杯飲んだ）」の概念を踏まえつつそれらを観察すると、「3

杯」は連体と遊離の二つの側面を有すると考えられる。つまり、体言（名詞）を修飾する数量詞としても、用言を修飾する数量詞としても理解が可能なわけである。一方、「三年」は、必ずしもそれと同様であるとは認められない。実例に基づいて纏めると、四つのパターンがあると言える。その内訳としては、連体数量詞としての用例が 23 例(15%)、遊離が 85 例(55%)、連体・遊離両立が 35 例(22%)、連体・遊離皆無が 13 例（8%）である。

【図二】



この四種のパターンについて、物事や出来事といった天地の万物を納めるものとしての過去、現在、未来という三つの時間の流れの閉鎖性、連続性、そして展開の様相に基づいて見れば、体言と用言を修飾する連体数量詞及び遊離数量詞としての「三年」は、時間の限定性が高く且つ閉鎖的な時間及び空間における流動性と変容性が顕著であり、「ひと区切りをつける」という数詞 3 の性質が目立つ。

しかし一方で、それが限定的な時限以外の世界で如何なる繋がりを持つかは明らかでないので、まずは「変化①（希望、成長）」、「変化②（禁忌、急変）」、「変化③（我慢、辛抱、待つ）」の三つの側面に分けて以下の用例を見ることとする。

【表二】

変化①	19 <u>いらぬ物も三年たてば用に立つ</u>
	121 <u>貧乏人も三年置けば用に立つ</u>
→	125 焙烙（ほうろく）の割れも <u>三年おけば役に立た</u> <u>つ</u>
希 望	151 わざくれも三年
	152 禍三年時（とき）の用
	153 禍も三年
	154 禍も <u>三年置けば = 用に立つ</u> [=役に立つ・福の種]
	156 破（わ）れ鍋も <u>三年置けば用に立つ</u>

以上の用例の時数詞三年は、すべて遊離数量詞である。これらに基づけば、時数詞三年は、前後の出来事を結びつける架け橋としての接続詞的な機能を持つと考えられる。つまり、時数詞三年は、諺・故事俗信の前半の「いらぬ物、貧乏人、焙烙の割れ、禍、破れ鍋」といったマイナス評価に傾く事象を繋ぎあわせることにより、希望を持たせてプラス評価に向けて励ますべく、後半に来る「福の種・役に立つ・用に立つ」という言葉に結びつける。これはとりもなおさず「三生萬物。萬物負陰而抱陽，沖氣以為和（三は万物を生ず。万物は陰を負ひて陽を抱き、沖氣もって和となす）」によって陰陽を調和させる作用に他ならない。これら前後の出来事を結びつける役割を果たすものは、「置けば」「たてば」等の語を導いて恰も和歌修辭法としての枕詞の如き機能を持つ三年という時数詞である。ここにおいて導かれるものは、「置く」や「経つ」の假定形の「置けば」と「たてば」のみならず、後半にある「福の種・役に立つ・用に立つ」という対称的にプラス評価を帯びる出来事や結果である。これは、まさに人に希望を懐かせつつ、調和の下で新事象を展開させることであり、老子の「三生萬物」という言葉に繋がるものである。

一方、物事等の変化を示す上述の用例と同様に、過ぎ去る時間を無為に浪費することなく成長することを表す例についても、以下のように挙げることができる。

【表三】

変化① → 成長	48 乞食の子も <u>三年たてば</u> 三つになる
	56 侍の子は <u>三年すれば</u> 三つになる
	62 <u>三年経てば</u> 三つになる
	113 馬鹿の子も <u>三年養えば</u> 三つになる

ここには「三年たてば」「三年すれば」「三年養えば」という表現を通して、乞食の子・侍の子・馬鹿の子などの下賤な階層の人々に対し、成長を意味するプラス評価としての「三つになる」という表現を結びつけることにより、希望を持たせるというイメージを読み取ることができるが、一方では新しい展開や変化という含意は必ずしも顕著ではない。

以下に示すのは、「変化①（希望、成長）」に次いで二つめの側面の「変化②（禁忌、急変）」に関する例である。ここでは、忌避されるイメージを持つ俗信が以下のように挙げられている。

【表四】

変化② → 禁忌	肯定	86 杓子で招かれると <u>三年の内に</u> 死ぬ (杓子で招るれば <u>三年の内に</u> 死ぬ)
	表現	90 新築の家に入って <u>三年の内に</u> 死人が有ると三人死人を出す
		105 寺の地内（じない）で転ぶと <u>三年の内に</u> 死ぬ
		110 墓で倒れたら <u>三年のうち</u> に死ぬ
禁忌 → 打消 激		127 墓地で転んだら片袖（かたそで）を置いて来るか、または、片袖を付け換えないと、 <u>三年経って</u> 死ぬ
	打	103 手水（ちょうず）をかけられると <u>三年</u> 生きない
	消	115 東向きに寝て猿の夢を見ると <u>三年しか</u> 生きられない
	118 人の胸を打つと <u>三年</u> 生きぬ	

変	現	139 胸を打たれると <u>三年</u> 生きぬ
		120 枇杷の棒で叩かれると <u>三年</u> 生きぬ
		124 箒で打たれると〔=叩かれると〕 <u>三年</u> 生きられない
		145 柚の木の棒で打たれると <u>三年</u> 生きない

これらの諺・故事俗信の用例の述語部分における形態には、肯定表現と打消表現の二つのパターンが見られる。また、それらの文はいずれも主に順接仮定条件を表す接続助詞「の」「ば」、そして順接確定条件を表す接続助詞「て」を使い、条件や因果関係を表す。物事等の自然的な変化・展開を示す側面がそれほど明白ではないものの、条件が成立し確定すれば、変化が発生しながらも逆に何も出ないという論理の下であたかもコロケーションの如くに前後呼応し、前半の出来事と後半の結果を結ぶ例が多い。ここに示した俗信故事の文の前半部における出来事は、主に瞬間的な動作もしくは偶発的な行為による事柄である。それに対し、後半部は、「三年」若しくは「三年の内」という「三年」に拘った表現の中で、命が掛かって思いがけなく「死ぬ、生きられない、生きない（生きぬ）」という結果・展開によってひと区切りをつけ、文末を結ぶ。こうした特徴は、古文世界の係結びの法則のような役割としてここでは機能している。

また、文中に使われている「三年の内」という副詞的な文節の三年自体が連体修飾構造であり、一見連体数量詞文のように見えるが、「三年の内」を前に移して、「三年の内に杓子で招かれると死ぬ」にすると不自然さを免れないので、ここではそれを時数詞「三年」と同じく遊離数量詞文と見なしておく。こうして見ると、「三年の内」と「三年」は、いずれも短期間内において近未来のうちに望ましくない結果が訪れるというイメージを有することが知られるとともに、それが禁忌を暗示するものとして人々の口から語られる傾向を持つという点も指摘できるのである。

前に示した俗信の文の前半部には、杓子、手水、枇杷や柚の木の棒、箒といった道具、または新築の家、寺の地内、墓地などの空間などがその特徴として現れる。これらの道具や空間は、いわゆる古

典文学の世界で言われるケ（褻）、ケガレ（穢）に対する非日常的なハレ（晴）、または俗に相對した聖的な空間であるとも言えよう。それだけに、こうした聖的な空間において何らかの禁忌を犯せば、陰陽二項の如くに反転して死後のケガレ(穢)の世界としての「あの世」をイメージさせる「死ぬ」「生き(られ)ない」という語が展開されることになる。

さらに三つめ「変化③（我慢、辛抱、待つ）」の側面について見ると、3を「三年商」（三年商いをすれば、何とかなる）、14を「三年の犬犬、一代の人人（三年の犬犬は、一代の人人）」と置き換えて言うことも可能であることから、これらの用例は、3と14の用例を除いてすべて遊離数量詞文であると言える。

【表五】

変化③ → 我慢 辛抱 待つ	3 商（あきない）三年
	8 石の上にも三年
	16 茨（いばら）の中にも三年
	50 薦（こも）の上にも三年
	119 火の中にも三年
	43 煙（けむる）中にも三年
	42 煙の中に <u>三年居らぬと姑</u> （しゅうとめ）の後には付けぬ
	95 染め物屋と鍛冶屋（かじや）を <u>三年辛抱すれば</u> 出世する
	58 <u>三年居れば</u> 温まる
	147 養子は火焚（ひたき）三年する
	117 痛いの〔＝痛さ〕は <u>三年でも辛抱する</u> （人の＝痛いの〔＝痛さ〕は <u>三年でも辛抱する</u> ）
	65 <u>三年飛ばず鳴かず</u>
	14 犬犬三年人＝一代〔＝一生〕、 人人三年犬＝一代〔＝一生〕

これらの用例は、いずれも「辛抱、我慢、待つ」といった動詞を修飾する遊離数量詞文である。これらについて文の形態から見れば、体言止めという和歌修辞法のような機能を持ちつつ、三年という時数詞で文を止めるものと、三年が間投助詞のように「辛抱、我慢、待つ」の中に入っているものとの二つの類型がある。前者は、主に「～にも三年」という型を取って時数詞三年で文を結ぶものの、そこでひと区切りをつけるわけではなく、未来への持続性や流動性を維持したままである。そのため、それらが未来に向けて無制限に開放された環境の中での出来事に繋がり、様々な物事に展開していくことが可能となる。

一方、後者は、時数詞三年が文頭に使われる例もあれば、文中に挟まれる例もある。前者と比べて、閉鎖的で持続性・流動性が低く、「辛抱」、または「出世」や「温まる」という結果が明確に強調される。しかしいずれにせよ、両者ともに未来の出来事への繋がりを持つという特徴を有している。したがってこの点において、時数詞三は老子が述べる「三生万物」の思想に呼応することとなる。用例に現れる具体的な事象から見れば、商売、生活（仕事、人間関係、出世）などが未来へ繋がるものとして挙げられている。ここにおいても、変化①（希望、成長）において述べた「希望を持たせるというイメージ、新しい展開、そして変化」という含意を読み取ることができる。

5. 結び

以上、時数詞三年を通してその文化的なイメージや意味を見てきた。四章においては、先ず変化①～変化③に着目することにより、俗信故事・諺における時数詞三年を分析した結果、連体・遊離両立時数詞文に見られる「商三年」と「犬犬三年人一代」の二つの用例を除いて、多くの用例が遊離時数詞文に属することが判明した。次に変化の概念に注目して観察を加えたところ、時数詞三年の用例は、いずれも「希望、成長」、「禁忌、急変」、「我慢、辛抱、待つ」というイメージを持つことを読み取ることができた。また文の形態に基づけ

ば、それぞれ古典和歌の枕詞と体言止めの修辞法及び古文の係結びの法則（コロケーション）に擬して見立てることができることも知られた。さらに、文末を結ぶ時数詞三年については、一見閉鎖的で流動性がないように思われる時数詞三年も未来の出来事へと繋がるのが可能であるだけに、全体として流動性や変容性がそこに存するという特徴も見い出せた。そして、変化①と変化③のように、時数詞三年を通して、限定的な時間以外の世界と繋がり、未来への連結性、新しい展開、希望、変化などによって織りなされた世界も、「三生万物」という老子思想に繋がるのが知られた。のみならず、新築の家、寺の地内、墓地などの空間をタブー、禁忌として日本古典の聖俗的な場所（空間）を表すハレ（晴）、ケ（褻）、ケガレ（穢）に関しても、時数詞三年が有する特質を通して理解できることがわかった。しかしながら、『伊勢物語』「梓弓」で述べられる例としての法的・制度的な慣習に基づく例は、俗信故事・諺においては見いだせなかった。とは言え、日本の『民法』第七百七十条第三項「配偶者の生死が三年以上明らかでないとき」、離婚の訴えを提起することができるという条文を見ると、法律面において今も変わらず3年という時限が採用されている点に、伝統の重みをそこに感じるができる。

一方、俗信故事・諺に表れる和語系の「三年（みとせ）」と漢語系の「三年（サンネン）」の比率に基づけば、そこに1対155の割合が存するので、漢語系の「三年」は日常生活に深く根付いており、文化面における通時的な連続性が顕著であるという点も検証することができた。とは言え、3という数詞が神秘的な意味を持つと言われる中であって、『3という数字』¹¹という作品においては、数字3は縁起が悪いものとして受け取られている。この見方は古今一様に認められる傾向であるとは言いがたい。ここには3が時代とともに変容する姿を想定できる。そのため、三年という時数詞の意味やイメ

¹¹青来有一（2008）『文學界』62(7)東京都：文藝春秋 pp.64-98

ージが時代とともに如何なる変容を示したかという点が、検証すべき課題として残る。

今回は、基礎的研究として、3に関して注目すべき点を指摘し、その特徴を見てきたが、不十分な点が少なくないであろうことを恐れる。今後は、漢語で三年を意味する「三載」「三歳」「三春」「三秋」等の語や、助数詞としての三年に関して語学的な観点からの検討をも兼ねて試みることにより、さらに考察を深めたい。

【付記】 本稿は 2019 年 11 月 2 日に台湾大学で行われた第四回東アジア日本研究協議会国際学術大会での発表に加筆修正したものである。

参考文献 (50 音順)

一 著作・論文

青来有一 (2008) 「3 という数字」『文學界』 62(7)東京都：文藝春秋 pp.64-98

片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子校注訳者 (2006) 新編日本古典文学全集 12『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』東京都：小学館 p138

加藤重広 (1997) 「日本語の連体数量詞と遊離数量詞の分析」『富山大学人文学部紀要』 26 号富山市：富山大学人文学部 pp.31-64

北村孝一編集 (2012) 『故事俗信 ことわざ大辞典 第二版 大型本』東京都：小学館

北原博雄 (2018) 「日本語における“[数詞+X]”の数詞数量詞性」『論叢』 第 59 号東京都：玉川大学文学部 pp.71-87

段玉裁 (2005) 『説文解字注 (標點本)』臺北市：藝文印書館 p9

吉村耕治 (2014) 「Active Learning の教材としての三重文肢構造 (Tricolon) : 言語文化的視点から見た日英語表現の文化的相違の多様性」『研究論集』 第 100 号大阪府枚方市：関西外国語大学短期大学部 p323

山口佳紀、神野志隆光校注・訳(2007)『新編日本古典文学全集 1 古
事記』東京都：小学館 p6

老子文・趙孟頫和鮮于樞書(2002)『道德經』商務印書館(香港) pp.70-
71

二 ネット資料

HP『象形字典』

[http://www.vividict.com/Public/index/page/details/details.html?rid
=12092](http://www.vividict.com/Public/index/page/details/details.html?rid=12092)

HP『數位經典』 <http://www.chineseclassic.com/LauTzu/LaoTzu05.htm>